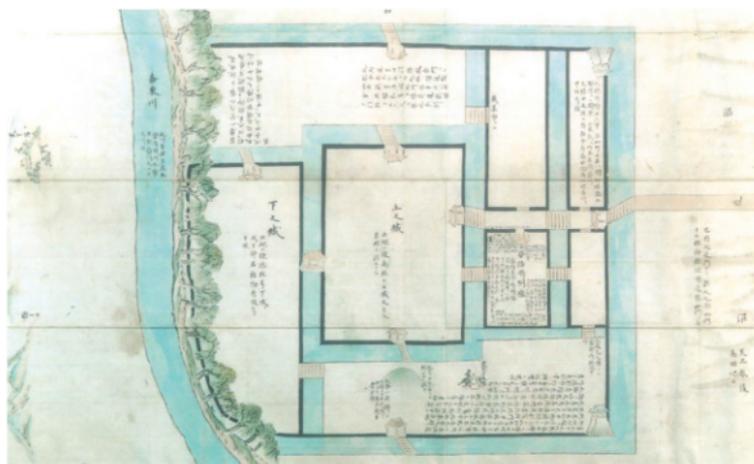


由佐城跡

—由佐城跡発掘調査報告書—

1997. 3

香南町教育委員会



(1) 由佐城繪圖



(2) 由佐城跡土壘断面土層



(3) 由佐城跡出土遺物

序 文

本報告書は、香南町歴史民俗郷土館整備事業に伴い平成8年7月から9月にかけて実施しました由佐城跡発掘調査の記録です。

由佐城跡は、中世、本町、香川町の一部、塩江町を含むいわゆる井原郷を中心に活躍した由佐氏の館跡です。

調査地点は、広大な由佐館の一角であって地元で“おしろ”と言われていたところであり、その子孫が最近まで居住していたところです。今回の調査におきまして平行する2本の堀が検出されました。このことと由佐城絵図を重ね合わせて、ありし日の由佐館を想像してみるのは大変夢のあることです。

我々の祖先が何を考えて生活していたのか、その一端にでも触れられたなら今回の調査が意味を持つことでしょう。

調査の結果出土した遺物や写真については、現在由佐城跡に整備しております香南町歴史民俗郷土館において展示をしたいと考えております。

最後になりましたが、本調査にあたりましては県教育委員会文化行政課の親切なご指導を戴きました。厚くお礼申し上げます。

平成9年3月31日

香南町教育委員会

教育長 栗 永 照 彦

例 言

1. 本報告書は、香南町立歴史民俗郷土館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県香川郡香南町大字由佐字中屋で実施した「由佐城跡」の発掘調査報告を収録した。
2. 発掘調査は、確認調査を香南町教育委員会が調査主体となり香川県教育委員会文化行政課が実施し、本調査を香南町教育委員会が実施した。
発掘調査の担当は以下のとおりである。

	確認調査	本調査
調査主体	香南町教育委員会	香南町教育委員会
調査担当	香川県教育委員会 文化財専門員 木下 晴一 片桐 節子 香南町教育委員会 小西 省三	
調査期間	平成8年7月29日～30日（実働2日）	1次 平成8年9月3日～30日（実働16日） 2次 平成8年10月14日～18日（実働5日）
調査面積	約50㎡	1次 約360㎡ 2次 約411㎡

3. 調査の実施及び本報告書の作成に当たっては、下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。

香川直孝 高木敏栄 小川信子 見藤静子 田井景子 藤本クミコ 永尾ナツ子
高橋秀男 上枝竹雄 高橋清子
㈱和泉建設 トーヨーリース㈱ 香川県建築設計協同組合 芝藤 茂

大橋康二 東信夫 信里芳紀 片桐孝浩

4. 本報告書の執筆・編集は、片桐が行った。
5. 本報告書で用いる方位の北は国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はT、Pを基準としている。
また、遺構は下記略号により表示している。

S P ・ ・ 柱穴

S K ・ ・ 土坑

目 次

第1章 調査の経緯	
調査に至る経過	1
調査の経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	
地理的環境	3
歴史的環境	3
第3章 調査の成果	
基本土層	6
調査の結果	6
柱穴	6
土坑	11
堀	13
溝	19
調査区内出土瓶	20
土塁	22
採集遺物	23
第4章 まとめ	26

挿 図 目 次

第1図 由佐城跡位置図	第15図 堀1・2・3検出状況
第2図 調査区配置図	第16図 堀1出土瓦実測図
第3図 周辺の遺跡位置図	第17図 堀1出土遺物実測図
第4図 遺構配置図	第18図 堀3出土遺物実測図
第5図 SP-01平・断面図	第19図 堀上層客土中出土遺物実測図
第6図 SP-09平・断面図	第20図 溝内出土遺物実測図
第7図 SP-18平・断面図	第21図 瓶1平・断面図
第8図 SP-19平・断面図	第22図 瓶2平・断面図
第9図 柱穴内出土遺物実測図	第23図 瓶3平・断面図
第10図 SP-20出土遺物実測図	第24図 瓶3土器実測図
第11図 SK-01平・断面図	第25図 南北土層断面図
第12図 土坑内出土遺物実測図	第26図 東西土層断面図
第13図 堀・土塁位置図	第27図 土塁地形測量図

第1章 調査の経緯

調査に至る経過

この度、香川県香川郡香南町において町立歴史民俗郷土館を建設する事となった。その建設予定地は「由佐城跡」として知られる周知の埋蔵文化財包蔵地に当たっていたため、埋蔵文化財掘調査の必要性が生じたのである。

「由佐城跡」は南北朝の時代、細川頼春に従って四国に渡ってきた益子氏（由佐氏）が構えた居館であるとされ、代々その子孫が居住していたが、主を失って以来その地は荒れ放題となっていたものである。屋敷内の西部には南北に約11mの土盛りが認められ、土塁であると言い伝えられていた。さらにここから東北方向には由佐左京進藤原秀盛の墓も残る。

調査の経過

調査は、確認調査を香川県教育委員会文化行政課が平成8年7月29日～30日（実働2日）までの期間で調査面積約50㎡（トレンチ3本）で実施した。その結果、一部に攪乱が認められるものの、ピット・土坑及び溝状遺構等が確認された。そのため、香川県教育委員会文化行政課と香南町教育委員会で協議し、本調査を実施することになったのである。

本調査は、香南町教育委員会が平成8年9月3日～9月27日（第1次調査・実働17日1/2、調査面積約360㎡）、10月14日～10月18日（第2次調査・実働5日、調査面積約411㎡）までの期間で実施した。第1次調査は、まず、予備調査の際、樹木の繁茂及び水田経営のためトレンチ設定が出来なかった部分に確認のトレンチを設定し、調査範囲の再確認から行った。その結果と予備調査の結果を踏まえ調査範囲を設定し調査を開始した。調査は重機により表土掘削し、その後人力により遺構検出に努めた。

調査終了間際で、調査区北西端において堀を検出した。時間的制約の下、堀の方向と土塁との関連を確認して調査は終了した。その後、県教育委員会文化行政課と香南町教育委員会との再協議の結果、堀の全容を確認することとなった。ただし、堀は調査員立ち会いのもと重機掘削とした。

第2次調査は堀の全容確認調査である。当初、堀は1本検出されていただけであったが、調査区を北に広げたとこ並行してもう1本検出し、さらに東側では当初の堀に続く形で南に1本が検出され、合計3本の堀が確認された。

第2章 遺跡の立地と環境

地理的環境

今回調査を実施した香川県香川郡香南町は香川県のはほぼ中央、県都・高松市の南に位置する。町域の北は高松市、東と南は同郡香川町、西は綾歌郡綾南町と接し周囲長18.30km、総面積14.72km²を持つ人口8千人足らずの町である。

町の東に讃岐山脈に源を持つ香東川、中央に香南台地を水源とする古川、そして西に本津川が、それぞれ北流して瀬戸内海に流れ出る。香南町はこれらの川が形成した沖積低地と阿讃山脈北麓の丘陵とその北方につづく洪積台地の上に立地している。

町の東部を県道円座香南線、西部に県道千疋高松線、中央部に町道吉光高根線がそれぞれ南北に通じており、さらにこれにいわゆる「さぬき新道」、県道三木綾南線が東西に貫通する。

平成元年には町南部の香南丘陵に高松空港が開港し、さらに隣接して「さぬき空港公園」や「園芸センター」、「さぬきこどもの国」等が整備されている。

今回調査を実施した「由佐城跡」は、町の東端中央部に位置し、ここは香東川が形成した扇状地上に立地する。現在も東側の水田は香東川に向かって次第に低くなっており、香東川の上に架かる橋には「城渡橋」の名称が残る。



第2図 遺跡位置図

歴史的環境

高松平野奥部に位置する香南町周辺では、遺跡はほとんど知られていない。

旧石器・縄文・弥生時代の遺跡は現在のところ確認されていない。しかし、岡地区で石器（石鏃・その他）が採集されていること、現在の香南小学校周辺の丘陵で昭和35・36年代に石器が採集されていること（遺物は現存しない）、旧由佐小学校校庭で採集されたという石器のスケッチ画の存在すること（遺物は現存しない）、また香川町安原下の下倉の八幡神社に神宝として破片であるものの、平形銅剣4口分が保存されており、これがいつ頃どこで出土したのかは不明であるが、これらの周辺に遺跡の存在の可能性は想定できる。

古墳時代後期に至って、その存在は明らかになる。大字岡字奥谷に城所山1・2号墳が立地している。昭和46年、開拓中に見つかったもので2基確認されたうち1号古墳は原形をとどめず記録保存とし、2号古墳のみ調査が実施された。2号古墳は横穴式石室を持った径12mの円墳で、刀子・鉄鏃・耳環・鉄鏃・須恵器が出土している。その他奥谷古墳は現存せず、若宮神社古墳・佐賀神社古墳とも墳丘上に祠が祭られているが、詳細については不明である。ここで町外に目を向けると、東隣の香川町でも多く古墳が造られており、国分寺町鷲ノ山産の刳抜式石棺が出土したと伝えられる古墳時代中期の前方後円墳の船岡山古墳、古墳時代後期の船岡古墳、横岡山古墳等がある。

古代になると、香南町は香川町旧川東村と旧安原村、塩江町全部を含めて香川郡井原の郷に属し



- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| 1. 由作城跡 | 5. 城所山2号墳 | 9. 船岡山古墳 |
| 2. 若宮神社古墳 | 6. 城所山1号墳 | 10. 船岡古墳 |
| 3. 佐賀神社古墳 | 7. 奥谷古墳 | 11. 横岡山古墳 |
| 4. 古田遺跡 | 8. 大坪窯 | |

第3図 周辺の遺跡位置図

序 文

本報告書は、香南町歴史民俗郷土館整備事業に伴い平成8年7月から9月にかけて実施しました由佐城跡発掘調査の記録です。

由佐城跡は、中世、本町、香川町の一部、塩江町を含むいわゆる井原郷を中心に活躍した由佐氏の館跡です。

調査地点は、広大な由佐館の一角であって地元で“おしろ”と言われていたところであり、その子孫が最近まで居住していたところです。今回の調査におきまして平行する2本の堀が検出されました。このことと由佐城絵図を重ね合わせて、ありし日の由佐館を想像してみるのは大変夢のあることです。

我々の祖先が何を考えて生活していたのか、その一端にでも触れられたなら今回の調査が意味を持つことでしょう。

調査の結果出土した遺物や写真については、現在由佐城跡に整備しております香南町歴史民俗郷土館において展示をしたいと考えております。

最後になりましたが、本調査にあたりましては県教育委員会文化行政課の親切なご指導を戴きました。厚くお礼申し上げます。

平成9年3月31日

香南町教育委員会

教育長 栗 永 照 彦

例 言

1. 本報告書は、香南町立歴史民俗郷土館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県香川郡香南町大字由佐字中屋で実施した「由佐城跡」の発掘調査報告を収録した。
2. 発掘調査は、確認調査を香南町教育委員会が調査主体となり香川県教育委員会文化行政課が実施し、本調査を香南町教育委員会が実施した。
発掘調査の担当は以下のとおりである。

	確認調査	本調査
調査主体	香南町教育委員会	香南町教育委員会
調査担当	香川県教育委員会 文化財専門員 木下 晴一 香南町教育委員会 小西 省三	片桐 節子
調査期間	平成8年7月29日～30日（実働2日）	1次 平成8年9月3日～30日（実働16日） 2次 平成8年10月14日～18日（実働5日）
調査面積	約50㎡	1次 約360㎡ 2次 約411㎡

3. 調査の実施及び本報告書の作成に当たっては、下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。

香川直孝 高木敏栄 小川信子 見藤静子 田井景子 藤本クミコ 永尾ナツ子
高橋秀男 上枝竹雄 高橋清子
(株)和泉建設 トーヨーリース(株) 香川県建築設計協同組合 芝藤 茂

大橋康二 東信夫 信里芳紀 片桐孝浩

4. 本報告書の執筆・編集は、片桐が行った。
5. 本報告書で用いる方位の北は国土座標系第IV系の北であり、標高はT、Pを基準としている。また、遺構は下記の略号により表示している。

S P ・ ・ 柱穴 S K ・ ・ 土坑

目 次

第1章 調査の経緯	
調査に至る経過	1
調査の経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	
地理的環境	3
歴史的環境	3
第3章 調査の成果	
基本土層	6
調査の結果	6
柱穴	6
土坑	11
堀	13
溝	19
調査区内出土瓶	20
土塁	22
採集遺物	23
第4章 まとめ	26

挿 図 目 次

第1図 由佐城跡位置図	第15図 堀1・2・3検出状況
第2図 調査区配置図	第16図 堀1出土瓦実測図
第3図 周辺の遺跡位置図	第17図 堀1出土遺物実測図
第4図 遺構配置図	第18図 堀3出土遺物実測図
第5図 SP-01平・断面図	第19図 堀上層客土中出土遺物実測図
第6図 SP-09平・断面図	第20図 溝内出土遺物実測図
第7図 SP-18平・断面図	第21図 瓶1平・断面図
第8図 SP-19平・断面図	第22図 瓶2平・断面図
第9図 柱穴内出土遺物実測図	第23図 瓶3平・断面図
第10図 SP-20出土遺物実測図	第24図 瓶3土器実測図
第11図 SK-01平・断面図	第25図 南北土層断面図
第12図 土坑内出土遺物実測図	第26図 東西土層断面図
第13図 堀・土塁位置図	第27図 土塁地形測量図

巻頭図版

- (1) 由佐城絵図
(2) 由佐城土壘断面土層
(3) 由佐城跡出土遺物

図版目次

- 第1図 (1)調査前状況(屋敷外 道路側から)
(2)調査前状況(東南から)
- 第2図 (1)土壘調査前状況(南から)
(2)調査区遠景(東南から)
- 第3図 (1)遺構完掘状況(全景)
(2)S P-01柱根検出状況
(3)S P-18柱根検出状況
- 第4図 (1)瓶3 検出状況
(2)瓶1 検出状況
- 第5図 (1)堀・池検出状況(北から)
(2)S K-01完掘状況
- 第6図 (1)堀1 断面状況(南西から)
(2)堀1 断面状況(西から)
- 第7図 (1)堀完掘状況(東上空から全景)
(2)堀完掘状況(東上空から東端部)
- 第8図 (1)堀完掘状況と墓地周辺地形(南上空から)
(2)由佐左京進藤原秀盛の墓
- 第9図 S P-10・S P-12・S K-01・S K-04・堀上客土出土遺物
- 第10図 堀1・堀3・溝内出土遺物
- 第11図 溝・採集・瓶2 出土遺物

第1章 調査の経緯

調査に至る経過

この度、香川県香川郡香南町において町立歴史民俗郷土館を建設する事となった。その建設予定地は「由佐城跡」として知られる周知の埋蔵文化財包蔵地に当たっていたため、埋蔵文化財掘調査の必要性が生じたのである。

「由佐城跡」は南北朝の時代、細川頼春に従って四国に渡ってきた益子氏（由佐氏）が構えた居館であるとされ、代々その子孫が居住していたが、主を失って以来その地は荒れ放題となっていたものである。屋敷内の西部には南北に約11mの土盛りが認められ、土塁であると言いつた。さらにここから東北方向には由佐左京進藤原秀盛の墓も残る。

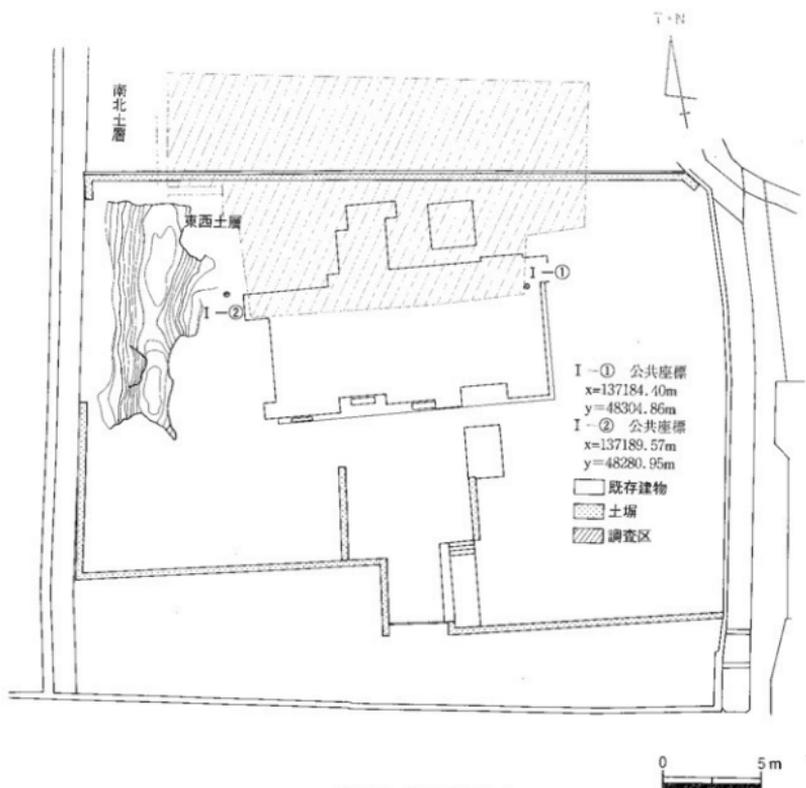
調査の経過

調査は、確認調査を香川県教育委員会文化行政課が平成8年7月29日～30日（実働2日）までの期間で調査面積約50㎡（トレンチ3本）で実施した。その結果、一部に擾乱が認められるものの、ピット・土坑及び溝状遺構等が確認された。そのため、香川県教育委員会文化行政課と香南町教育委員会で協議し、本調査を実施することになったのである。

本調査は、香南町教育委員会が平成8年9月3日～9月27日（第1次調査・実働17日1/2、調査面積約360㎡）、10月14日～10月18日（第2次調査・実働5日、調査面積約411㎡）までの期間で実施した。第1次調査は、まず、予備調査の際、樹木の繁茂及び水田経営のためトレンチ設定が出来なかった部分に確認のトレンチを設定し、調査範囲の再確認から行った。その結果と予備調査の結果を踏まえ調査範囲を設定し調査を開始した。調査は重機により表土掘削し、その後人力により遺構検出に努めた。

調査終了間際で、調査区北西端において堀を検出した。時間的制約の下、堀の方向と土塁との関連を確認して調査は終了した。その後、県教育委員会文化行政課と香南町教育委員会との再協議の結果、堀の全容を確認することとなった。ただし、堀は調査員立ち会いのもと重機掘削とした。

第2次調査は堀の全容確認調査である。当初、堀は1本検出されていただけであったが、調査区を北に広げたとこ並行してもう1本検出し、さらに東側では当初の堀に続く形で南に1本が検出され、合計3本の堀が確認された。



第1図 調査区位置図

第2章 遺跡の立地と環境

地理的環境

今回調査を実施した香川県香川郡香南町は香川県のほぼ中央、県都・高松市の南に位置する。町域の北は高松市、東と南は同郡香川町、西は綾歌郡綾南町と接し周囲長18.30km、総面積14.72km²を持つ人口8千人足らずの町である。

町の東に讃岐山脈に源を持つ香東川、中央に香南台地を水源とする古川、そして西に本津川が、それぞれ北流して瀬戸内海に流れ出る。香南町はこれらの川が形成した沖積低地と阿讃山脈北麓の丘陵とその北方につづく洪積台地の上に立地している。

町の東部を県道円座香南線、西部に県道千疋高松線、中央部に町道吉光高根線がそれぞれ南北に通じており、さらにこれにいわゆる「さぬき新道」、県道三木綾南線が東西に貫通する。

平成元年には町南部の香南丘陵に高松空港が開港し、さらに隣接して「さぬき空港公園」や「園芸センター」、「さぬきこどもの国」等が整備されている。

今回調査を実施した「由佐城跡」は、町の東端中央部に位置し、ここは香東川が形成した扇状地上に立地する。現在も東側の水田は香東川に向かって次第に低くなっており、香東川の上に架かる橋には「城渡橋」の名称が残る。



第2図 遺跡位置図

歴史的環境

高松平野奥部に位置する香南町周辺では、遺跡はほとんど知られていない。

旧石器・縄文・弥生時代の遺跡は現在のところ確認されていない。しかし、岡地区で石器（石鏃・その他）が採集されていること、現在の香南小学校周辺の丘陵で昭和35・36年に石器が採集されていること（遺物は現存しない）、旧由佐小学校校庭で採集されたという石器のスケッチ画の存在すること（遺物は現存しない）、また香川町安原下の下倉の八幡神社に神宝として破片であるものの、平形銅剣4口分が保存されており、これがいつ頃どこで出土したのかは不明であるが、これらの周辺に遺跡の存在の可能性は想定できる。

古墳時代後期に至って、その存在は明らかになる。大字岡字奥谷に城所山1・2号墳が立地している。昭和46年、開拓中に見つかったもので2基確認されたうち1号古墳は原形をとどめず記録保存とし、2号古墳のみ調査が実施された。2号古墳は横穴式石室を持った径12mの円墳で、刀子・鉄鏃・耳環・鉄鏃・須恵器が出土している。その他奥谷古墳は現存せず、若宮神社古墳・佐賀神社古墳とも墳丘上に祠が祭られているが、詳細については不明である。ここで町外に目を向けると、東隣の香川町でも多く古墳が造られており、国分寺町鷲ノ山産の朝抜式石棺が出土したと伝えられる古墳時代中期の前方後円墳の船岡山古墳、古墳時代後期の船岡古墳、横岡山古墳等がある。

古代になると、香南町は香川町旧川東村と旧安原村、塩江町全部を含めて香川郡井原の郷に属し

ていた。町内では小田池の南古田から古川の線以東に条里が明瞭に確認できる。隆二2年(1143)に書かれた安泰寺院の大致官廳により復元すると、香南町最北端は6条8里6の坪にあたり、庄依の城渡橋から西に向かって延びた県道綾南川東線は4条4里32坪から6条4里33坪までの北端の線に当たる。尚、香川郡の里の起点は高根山の高根龍王神社と考えられている。

平安時代では大字西庄字大坪で大坪窯跡が確認されている。昭和12年柿畑開墾中に発見されたもので全長8m、焚き口幅1m、中央部幅1.8m、3段の焼成室が検出された。須恵器の皿・平瓶・高坏・碗などが出土している。

大字古田に位置する古田遺跡は、昭和48年に調査が実施された塚であるが、その詳細については不明である。

町舎の道路を隔ててすぐ南に所在する冠櫻神社は貞観3年(861)に智証大師円珍により創建されたと伝えられており、細川氏一族の尊崇を受けて隆盛し、国の重要文化財に指定された万葉集「天治本」を所蔵している。

その他、中世・近世の由佐家文書も多く、貴重な資料として残る。



- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| 1. 由佐城跡 | 5. 城所山2号墳 | 9. 船岡山古墳 |
| 2. 若宮神社古墳 | 6. 城所山1号墳 | 10. 船岡古墳 |
| 3. 佐賀神社古墳 | 7. 奥谷古墳 | 11. 横岡山古墳 |
| 4. 古田遺跡 | 8. 大坪窯 | |

第3図 周辺の遺跡位置図

第3章 調査の結果

基本土層

調査区はもともと由佐家の屋敷であったものを大正年間に北半分を売却して水田とし、残り南半分を屋敷として利用していたもので、土層によって区切られていた。そのため基本土層は若干異なっている。屋敷地内であった部分は表土直下、南側はほぼ黄褐色粘質の地山層に至り、北側は約20～40cm程度の客土が認められ、その下層で黄褐色粘質の地山層に至る。水田部分は耕土直下黄褐色粘質土層に至る。遺構はほとんど耕土もしくは表土直下で検出した。ただし堀については、客土下での確認である。

調査の結果

調査の結果、1次調査では柱穴・土坑・池・堀を確認した。遺構は調査区全域に拡がりを見るが、調査区中央部分に密な傾向が認められる。遺物の出土は少量である。

なお、堀と池は切りあっており、堀についてはその一部を調査したにすぎず、その存在の方向の確認に留まった。また、土塁については測量調査を実施した。

2次調査は堀の全容と土塁の確認調査である。その結果さらに2本の堀と土塁の版築が確認された。

柱穴

S P-01 (第5図)

調査区北部で検出したものである。表土直下、客土上面で検出したもので掘2の上面に位置する。検出規模は天径約29cm、底径約15cm、深さ約66cmを計る。柱根は底面から約15cm上から検出したもので、径約13cm、現存長約20cmを計る。埋土は青褐色粘質土層を呈し、遺物は出土しなかった。

S P-02

調査区北端で検出した。埋土の色調は青灰色粘質を呈している。土師質の坏が出土している。

S P-03

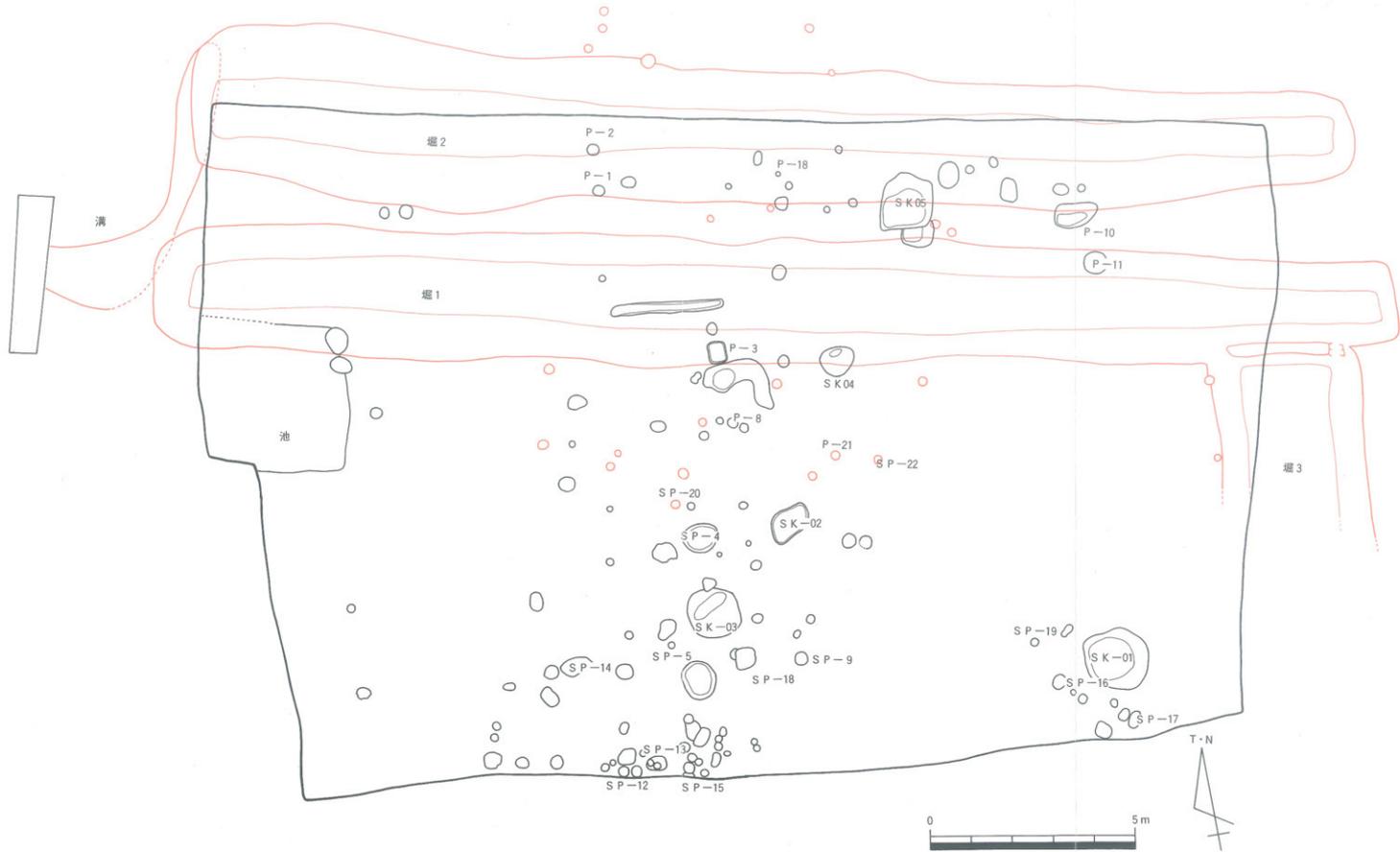
調査区ほぼ中央部で検出した。埋土の色調は青灰色粘質を呈しており、磁器の碗底部が出土している。

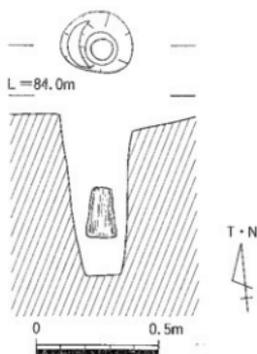
S P-04

調査区ほぼ中央部、地山面で検出した。埋土の色調は青灰色粘質を呈しており、唐津灰釉鉢が出土した。

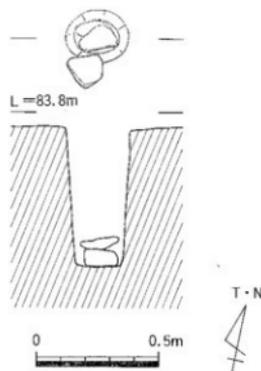
S P-05

調査区ほぼ中央部、地山面で検出した。埋土の色調は青灰色粘質を呈しており、土師器の坏が出土した。

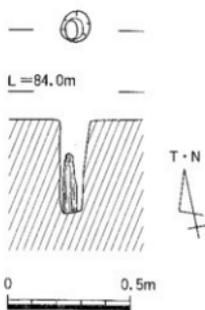




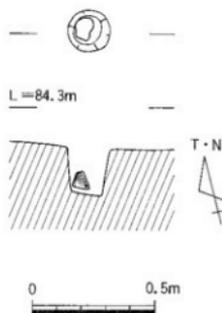
第5図 SP-01平・断面図



第6図 SP-09平・断面図



第7図 SP-18平・断面図



第8図 SP-19平・断面図

SP-08

調査区ほぼ中央部、客土面で検出した。埋土の色調は青褐色粘質を呈しており、磁器が出土した。

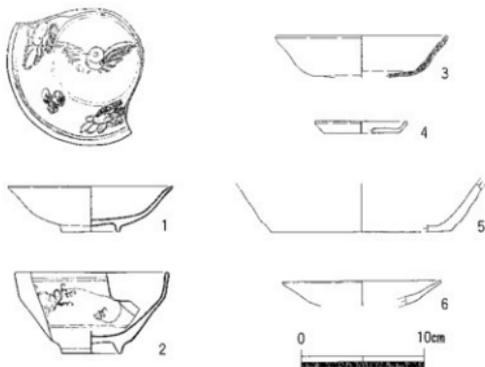
SP-09 (第6図)

調査区中央部やや南寄り、地山面で検出したものである。検出規模は径約26cm、深さ約57cmを計る。柱根の下部に2段の根石を確認した。埋土は青褐色粘質土層を呈し、遺物は出土しなかった。

SP-10(第9図 1・2)

調査区北部，客土面で検出した。堀2の上面に位置する。埋土の色調は黒褐色粘質を呈しており，磁器が出土した。

1は肥前染付の皿である。内面見込み部に鳥が描かれている。高台内には施釉されていない。1630年～1640年のものと考えられる。2は肥前染付の天目型の椀である。外面に花が描かれている。高台内面には施釉されていない。1630年～1640年のものと考えられる。



第9図 柱穴内出土遺物実測図

SP-11

調査区北東部，客土面で検出した。堀1の上面に位置する。埋土の色調は灰褐色粘質を呈する。磁器片が出土した。

SP-12(第9図 3)

調査区南部，地山面で検出した。埋土は黒灰色粘質を呈しており，須恵器・坏が出土した。13世紀前半のものと考えられる。

SP-13

調査区南部，地山面で検出した。埋土は黒灰色粘質を呈しており，須恵器・坏片が出土した。

SP-14

調査区南部，客土面で検出した。埋土は茶褐色粘質を呈しており，土師器の小皿・磁器片が出土した。

SP-15(第9図 4)

調査区南部，客土面で検出した。土師器・小皿が出土した。内外面とも横なでを施し，底部は糸切りである。中世のものと思われる。

SP-16

調査区南東部，地山面で検出した。土師器の小皿が出土した。

S P-17 (第9図 5)

調査区南東部、地山面で検出した。土師質の擂鉢が出土した。

S P-18 (第7図 第9図 6)

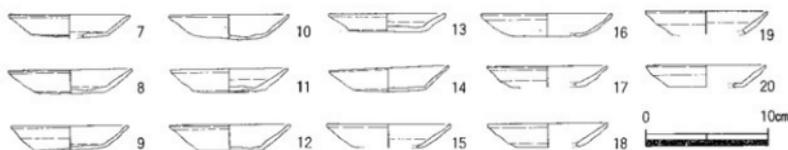
調査区北部、客土上で検出したものである。堀2上に位置する。検出規模は径約12cm、深さ約38cmを計る。柱根は底面から検出し、規模は径約8cm、現存長約25cmを計る。埋土は青褐色粘質土層を呈し、土師器の小皿が出土した。中世のものと思われる。

S P-19 (第8図)

調査区南東部、地山面で検出した。検出規模は径約17cm、深さ約20cmを計る。柱根は底面から若干浮いた位置から検出した。径約5cm、現存長約8cmを計る。遺物は出土していない。

S P-20 (第10図)

調査区には中央部で検出した。埋土は黒灰色粘質を呈しており、柱穴内から土師器小皿14点以上が重なり合った状態で出土した。中世のものと思われる。



第10図 S P-20出土遺物実測図

土坑

S K-01 (第11図 第12図 21)

調査区南東部、地山面で検出した。検出規模は径約1.65m、深さ0.6mを計り、平面形態は不正円形を呈する。埋土には拳大から人頭大までの川原石を多く含んでおり、その状況から人為的な廃棄が想定される。遺物は埋土中から出土した。唐津・染付の吹墨皿である。口縁部に口サビを施している。1610年代のものと考えられる。

S K-02

調査区中央部で検出したものである。その検出規模は短辺約0.8m、長辺約1.2mの楕円形を呈し、深さ約0.1mを計る。

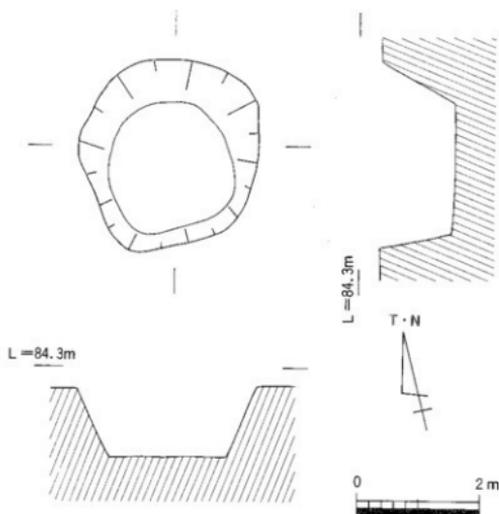
S K-03

調査区中央部で検出したものである。検出規模は径約1.2mのほぼ正円形を呈し、深さ約38cmを

計る。土坑内から礫大の多量の石が出土し、卵形の土坑を検出した。

S K-04 (第11図 22・23)

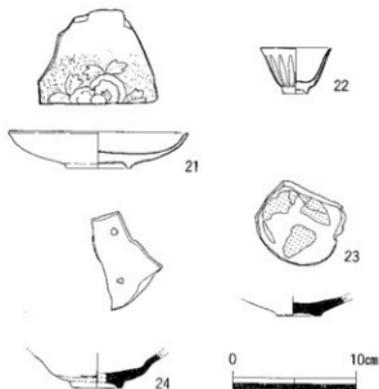
調査区中央部で検出したものである。検出規模は0.7m～0.8mの不正円形を呈し、深さは約0.7mを計る。堀1の上面に位置する。遺物は埋土中から出土した。22は白磁のぐい呑みである。1640年～1650年代のものと思われる。23は唐津・灰釉碗である。内面に4カ所砂目積みの痕跡が認められる。



第11図 S K-01平・断面図

S K-05 (第12図 24)

調査区北部、客土上で検出した。検出規模は径約1.2mのほぼ正円形を呈し、深さ約20cmを計る。土坑内から小礫～人頭大の石を多量に検出した。その状況から人為的な廃棄が考えられる。遺物は埋土中から出土した。24は唐津灰釉碗である。内面見込み部に2ヶ所の胎土目積みの痕跡が認められる。1590～1610年のものと思われる。



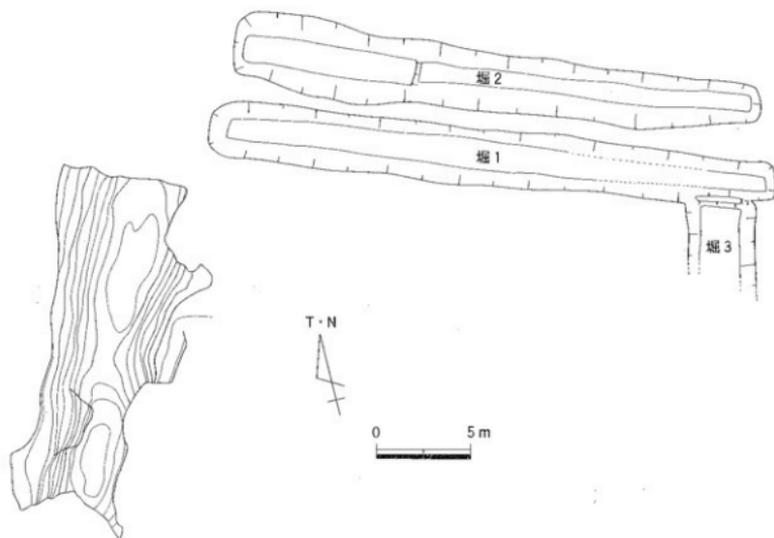
第12図 土坑内出土遺物実測図

堀 (第13・14・15・16・17・18・19図)

堀は計3本を検出した。当初調査区北西端で人頭大の川原石が集中して出土したため掘削したところ、堀と池であることを確認したものである。池の規模は、南北約3.4m、東西は完掘していないため現存長3.4mであるが、若干は伸びるものとする。

最初に検出した堀1は土塁の北約2mの位置から東に長さ約30.5m、幅2～3.2m、深さは西部で約1.4m、中央部で約1.3m、中央やや東寄りで一段高くなり約1m、東部で約1.5mを計る。堀2は堀1の北約1mから東へ長さ約28m、幅約2～3m、深さは西部で約1.1m、中央やや西寄りで一段低くなり約1.4m、東部で約1.3mを計る。堀1の東約1mから南に伸びる堀3は完掘していないが幅約3.5m、深さ約1m、現存長約4mを計る。これは後に確認したところ長くは伸びないようであった。この堀3は堀1と幅約0.4mの溝でつながっており、それは堀1側が高く、堀3側が低かった。堀1の水がオーバーフローしたときのための堀のようである。実際、堀1・2ともその埋土は常に水がたまっていたような青灰色の粘質土で掘削中も泥臭さがあつたが、堀3はその青灰色粘質土層の堆積が少なかった。

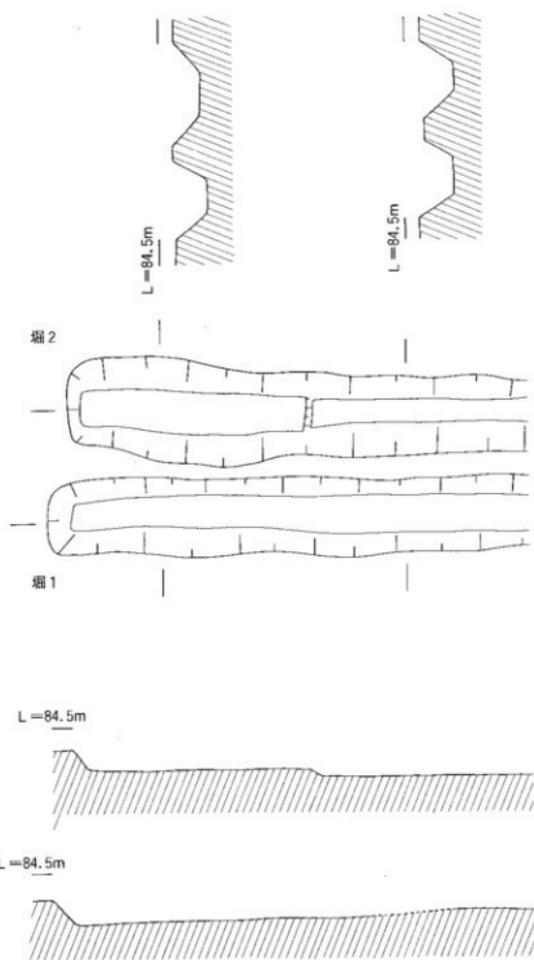
各堀内からは陶器・瓦・木片・炭化した材木等が出土した。またその埋土にはいずれも人頭大の川原石が多く含まれ人為的な廃棄が考えられる。



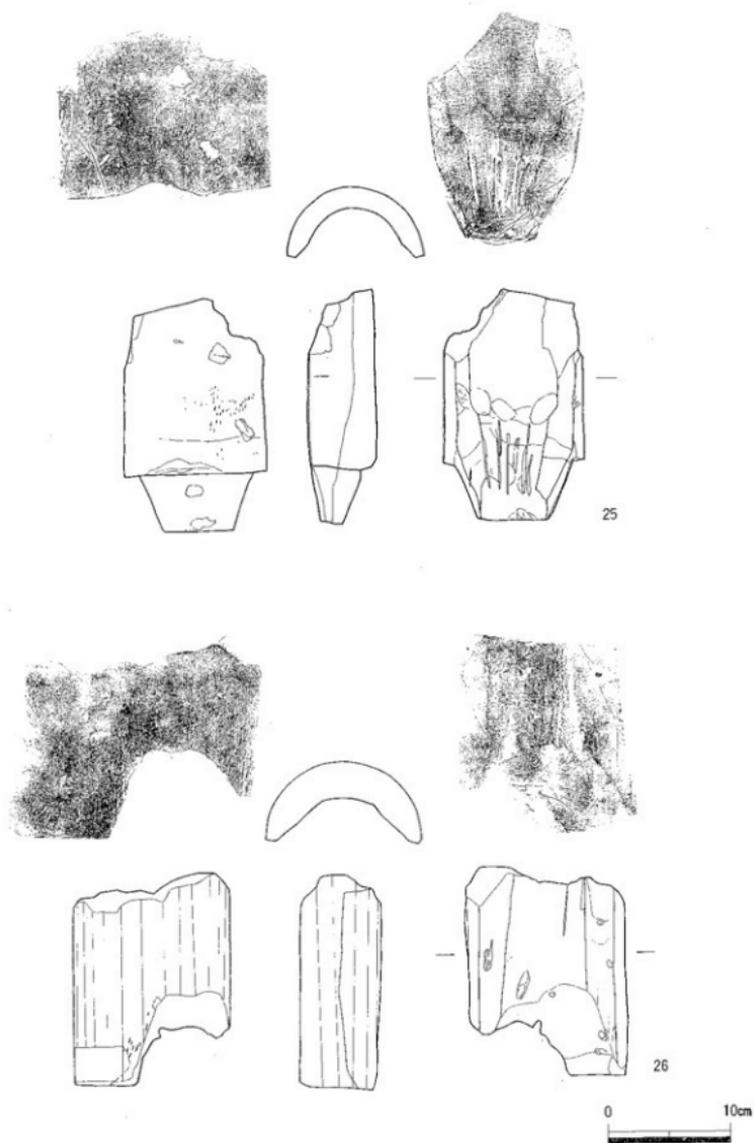
第13図 土塁と堀の位置関係



第14図 堀・池検出状況



第15図 堀1・2・

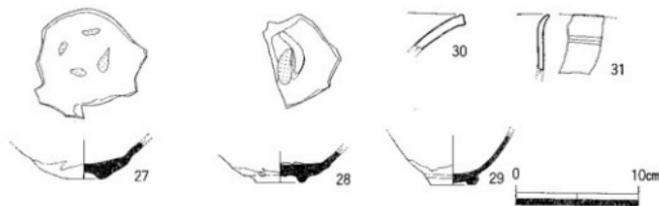


第16图 堀1出土瓦実測図

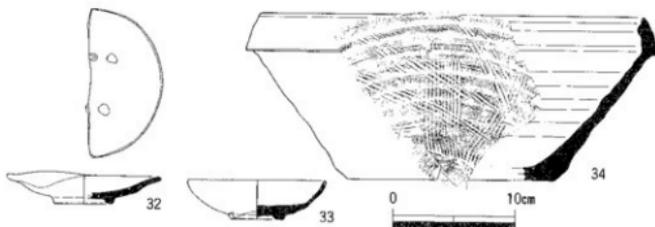
25は堀1内青灰色粘質土層中の石と石の重なり合った層から出土したものである。須賀夏の灰色を呈し、表面にタタキ痕、背面に布目と指頭痕が残る。非常に丁寧な作りで、室町時代のもと考えられる。26は青灰色粘質土層中のやや上位から出土したものである。表面にタタキ痕、背面に布目痕が残る。戦国時代のもと考えられる。27～31は堀1内出土遺物である。27は唐津灰釉碗である。内面見込み部に4ヶ所の砂目積みの痕跡が認められる。底部の作りがやや古手の様相を呈している。28は唐津灰釉碗である。内面見込み部に砂目積みの痕跡が残り、陶器片が溶着している。29は唐津灰釉碗である。いずれも1600年～1630年のものと思われる。30は唐津大皿である。外面に灰釉、内面に鉄釉を施している。1590年～1630年のものと思われる。31は唐津鉢である。1590年～1630年のものと思われる。片口の可能性もある。

32～34は堀3出土遺物である。32は唐津灰釉皿である。内面見込み部に2ヶ所の胎土目積みが残り、初殺の痕跡も認められる。1590年～1610年のものと思われる。33は唐津灰釉碗である。やや発色が悪く緑色を呈している。34は備前焼きの播鉢である。16世紀頃のものと思われる。

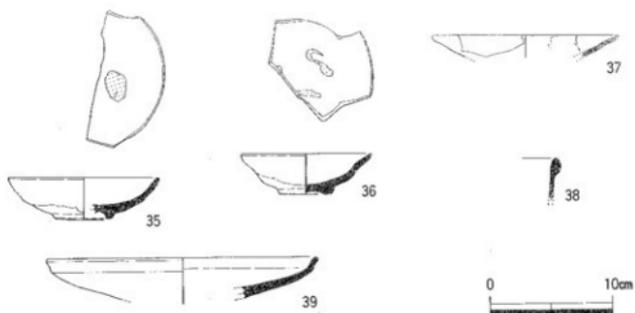
堀2から遺物は出土していないが、堀1・3の出土遺物の時期には大差が認められず、それぞれの堀の検出状況からも同時期に機能していたものと考えられる。



第17図 堀1出土遺物実測図



第18図 堀3出土遺物実測図



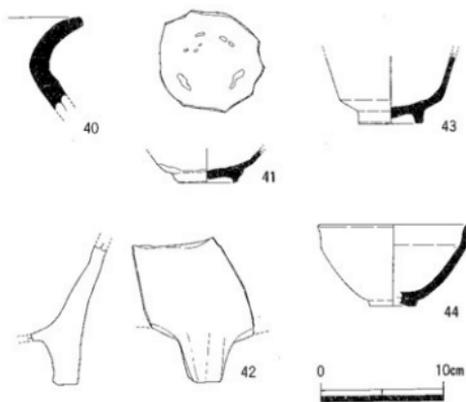
第19図 堀上客土出土遺物実測図

35～39は堀の上層客土中から出土したものである。35は唐津灰釉碗である。内面見込み部に1ヶ所砂目積みの痕跡が認められる。36は唐津灰釉碗である。内面見込み部に3ヶ所砂目積みの痕跡が認められる。37は唐津灰釉皿である。内面に鉄釉で線状を描く。38は唐津灰釉の壺である。39は唐津灰釉の大皿である。堀から出土したものと時代的には大差がないようである。

溝 (第20図)

堀の上層、客土上面から掘り込まれた溝で、土塁の西から北側を通りさらに北曲して堀1の西端をかすめ、堀2の西部北側で終わる。幅0.5～1.6mの浅い溝で埋土から遺物が出土した。40は須恵器・甕の口縁部である。

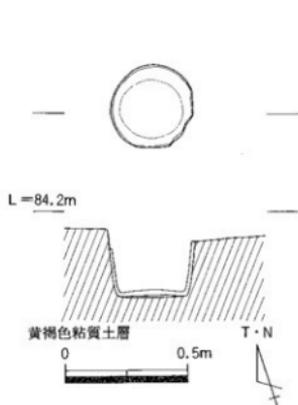
外面体部に格子目のタキを施し、口縁部内外面は横ナデする。12世紀頃のものと思われる。41は唐津灰釉碗である。内面見込み部に4ヶ所程度の砂目積みの痕跡が認められる。42は土師質の火鉢である。近世のものと思われる。43は唐津灰釉碗である。高台が高くがっちりとしており、砂目積みの痕跡が認められる。44は京風陶器の天目碗である。内外面とも鉄釉を施す。



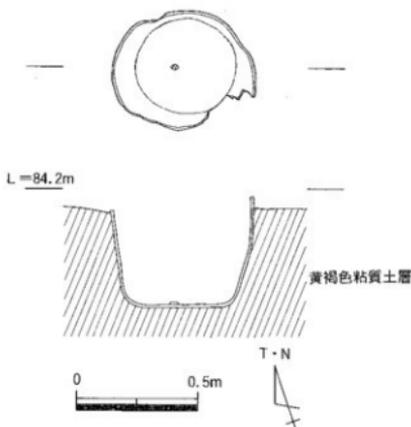
第20図 溝内出土遺物実測図

調査区内出土壺（第21・22・23・24回）

調査区内で瓶を3基検出した。いずれも調査区の南部よりの地山面であるが、その掘方はほとんど認められなかった。瓶1は土師質のもので瓶内からは何も出土しなかった。瓶2も土師質のものであるが、内部から土師質の灯明皿・染付の皿・外面に煤が付着した陶器の碗・青銅製の環が出土した。いずれものつは等の類ではないかと思われる。

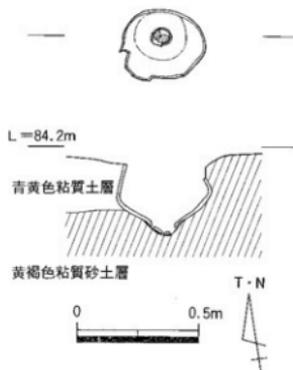


第21図 瓶1平・断面図

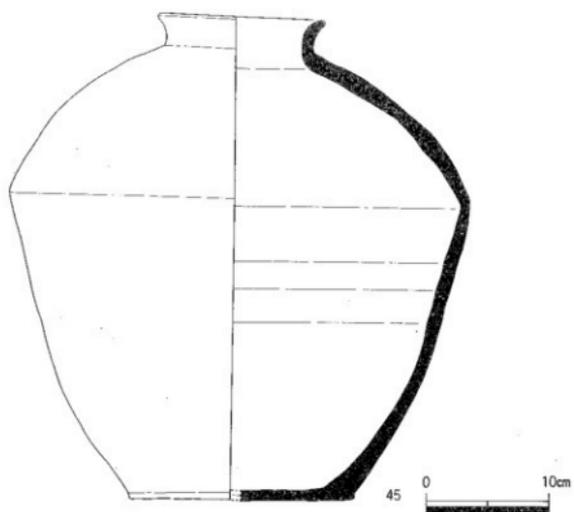


第22図 瓶2平・断面図

瓶3は調査区南部西寄りで検出した。これは口縁部を下に底部を上にした状態で検出され、下側の口縁部下には小石が2個認められた。底部はないものと思われたが、重機稼働中に採集した遺物に底部片が含まれていた。約半分は欠損するが、初めからなかったものかどうかの判断はできない。さらに口縁部はほとんど欠損していたが、堀の上層客土中から出土したものが接合できた。短く外反する口縁部と肩部にやや張りを持った体部を持ち、赤銅色の色調に口縁部下体部上半に淡緑色の釉を施している。



第23図 瓶3平・断面図



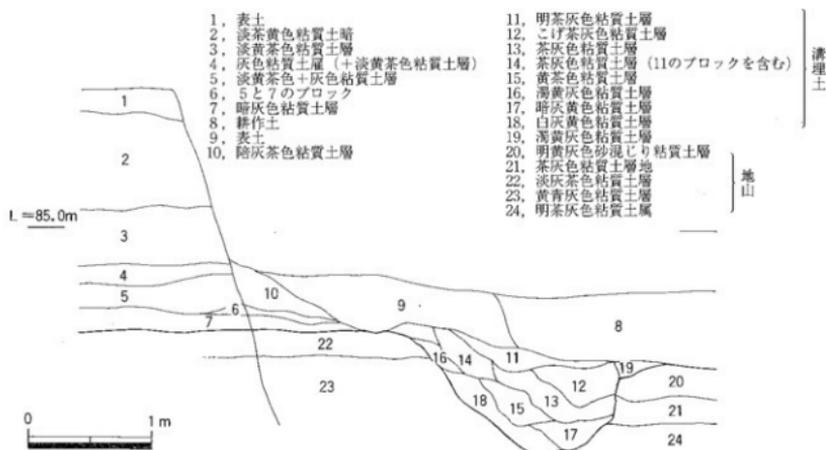
第24図 瓶3実測図

土塁 (第25・26・27区)

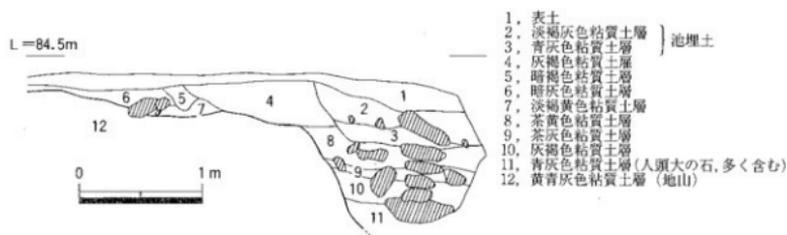
調査区の西側に南北約11mに盛り土状のものが認められた。土塁といわれていたものであるが今回初めて地形測量と土層の断面観察を実施したものである。

測量調査の結果、土塁は南北に約11m、幅は約2~3.5m、高低差は約2.2mを計る。南側に約0.5m程度の高まりが認められる。東と南北に崩壊を受けており、東側には後世の瓦だまりが残る。東北端部分の大きくえぐれた東側に池が掘られている。南側については不明であるが、北側については現存より少なくとも約0.8m程度は存在していた事が判明した。その北側に堀の上を走る溝が掘削されている。

土層観察は北端部で実施した。茶黄色粘質の地山の上層に暗灰色粘質土層が拡がっており、この



第25図 南北土層断面図

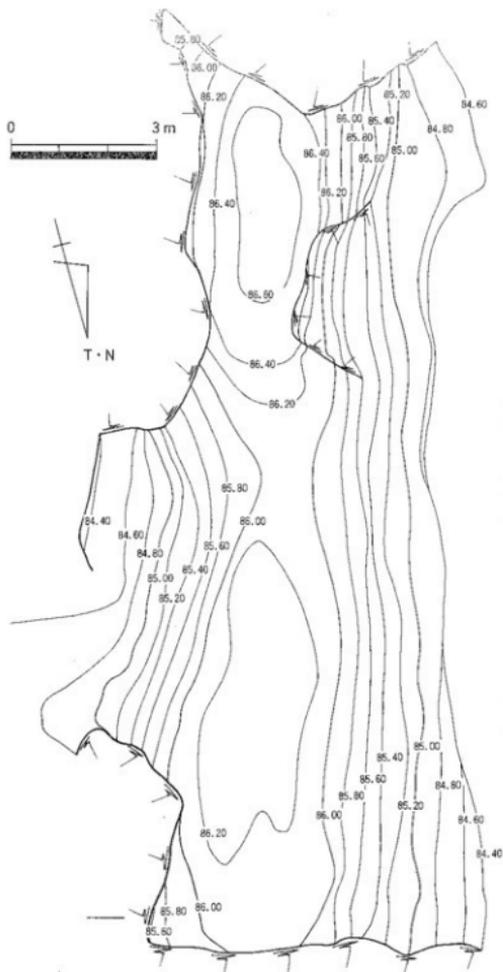


第26図 東西土層断面図

土層中から中世と思われる須恵質の体部片が出土した。この上層に地山の茶黄色粘質土と暗灰色粘質の版築層が約0.5mの厚さで認められた。これにより、土塁であると判断した。削平を受けた可能性は否定できないもののこの版築層の東西部分の盛土はさくく、礫が混じり、さらに西側には溝が掘削されていることから、後世の盛土と考えられる。版築部分の上層の盛土については、版築層とは同時期であるかどうか不明であるがこれも土塁の盛土であると考ええる。淡白褐色粘質土層から土師質の体部片が出土している。

採集遺物（第28図）

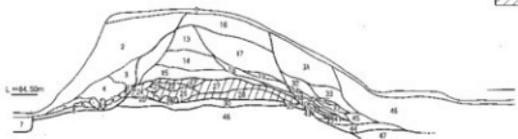
46・47は瓦である。42は表面はヘラミガキ、裏面は6本のヘラ調整とコビキBが認められる。43はヘラケズリが認められる。いずれも江戸以降のものと思われる。48は須恵器の口縁部である。古代のものであろう。49は須恵質の椀である。50は土釜の脚である。51は白磁の壺口縁部である。48二重網目文の椀である。17世紀頃のものであろう。53は白磁椀である。がっしりした高台を持ち、高台内には施釉しない。54は白磁椀である。高い高台は丁寧に削り出して作られており、高台内には施釉しない。55は唐津刷毛目大皿である。白化粧土により刷毛目装飾を施した後、透明釉をかけたもので、17世紀後半から18世紀初めにかけてのものである。56は常滑焼の瓶底部である。外底面に窯刻印が認められる。その他、京風陶器・瀬戸・美濃・肥前近隣のもの等出土しており、時期も17世紀から19世紀のものが見られる。



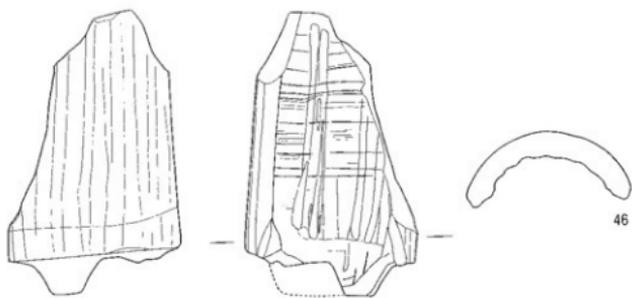
1. フシヨク土
2. 淡褐色粘質土層 (さくい、礫混)
3. 黄褐色粘質土層 (12より黄味が強い)
4. 褐色粘質土層
5. 淡褐色粘質土層
6. 淡黄灰色粘質土層
7. 青灰色粘質土層 (池の埋土)
8. 茶黄色粘質土層
9. 暗褐色粘質土層
10. 明褐色粘質土層
11. 明褐色粘質土層
12. 淡黄褐色粘質土層
13. 淡黄褐色粘質土層 (12よりやや濃い)
14. 淡白褐色粘質土層 (山石混)
15. 茶黄褐色粘質土層 (ややさくい)
16. 明褐色粘質土層 (ややさくい)
17. 淡黄褐色粘質土層 (12と似る)
18. 灰白色粘質土層
19. 灰紫褐色粘質土層
20. 淡灰緑青色粘質土層
21. 灰青黄色粘質土層 (21よりやや濃い)
22. 灰褐色粘質土層
23. 暗褐色粘質土層
24. 淡褐色粘質土層
25. 淡褐色粘質土層
26. 茶灰色粘質土層
27. 暗茶青色粘質土層
28. 淡青褐色粘質土層
29. 淡黄青灰色粘質土層
30. 暗灰色粘質土層
31. 淡褐色粘質土層
32. 淡黄褐色粘質土層 (32よりやや濃い)
33. 淡黄褐色粘質土層
34. 淡黄褐色粘質土層
35. 暗褐色粘質土層 (37よりやや濃い)
36. 褐色粘質土層
37. 褐色粘質土層
38. 褐色粘質土層
39. 茶黄色粘質土層
40. 褐色砂質土層
41. 褐色砂質土層 (茶黄色粘土混)
42. 淡青灰色粘質砂土層
43. 濁青黄灰色粘質土層
44. 濁灰色粘質土層
45. 暗褐色粘質土層
46. 褐色粘質土層 (さくい、瓦片混)
47. 濁茶青色粘質土層
48. 茶黄色粘質土層 (地山)

版築層

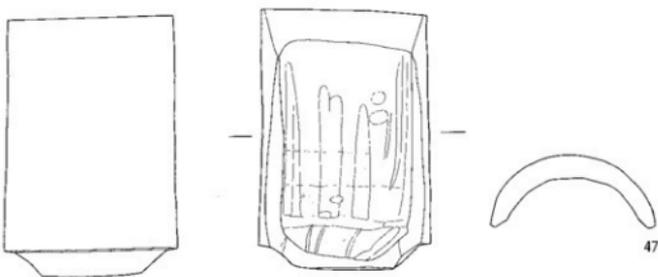
版築層



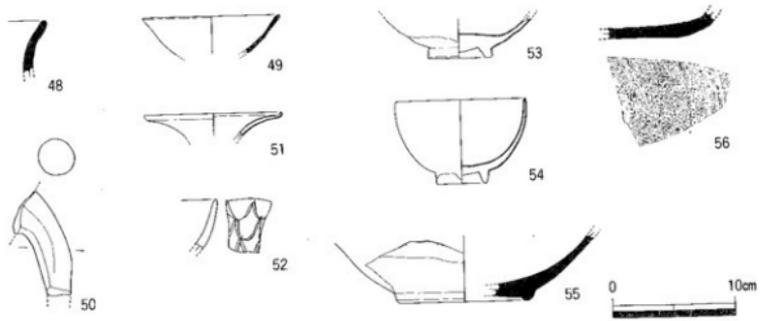
第27図 土壘地形測量・土層断面図



46



47



48

49

53

56

51

54

50

52

55



第28图 採集遺物実測図

第4章 まとめ

今回の調査の結果、多数の遺構を検出した。遺物からは少量中世のものも認められるが、多くは17世紀初頭のものが大半を占める。

由佐氏は下野国益子を本貫地とし、益子姓を名乗っていたが、建武年間、細川頼春に従って来讃し、香川郡井原庄を得て由佐に住居し、姓も由佐と称した。

土塁の構築時期は不明であるが、版築層の下層から出土した遺物により中世もしくはそれ以降と考えられる。堀との関係は明確にできなかったが、堀は土塁の東からはほぼ並行して掘削が開始されており、土塁の存在を意識していると思われること、堀を掘削した土で版築したと考えるのが妥当であることから同時期に構築されたと考えたい。堀からは唐津灰釉椀等近世初頭のもので出土しているが、これは掘削時期ではなくむしろ人為的に埋められた時期のものであると考えられる。堀が埋められ、客土をひいた後、上層に新たな遺構が構築されていったようであるが、堀及び客土から出土する遺物は陶器で磁器は認められず、客土上から掘り込まれた遺構には磁器が認められることから、堀を埋めた時期を寛永年間に求められるものと考えられる。

由佐城には江戸時代に描かれたという絵図が残っており、それによると城域は方4町とされ、堀で区切られた上之城、下之城、阿倍精明跡がある。さらに城域の南には株木南門が描かれているが、これは、現在もその地名が残る。今回の調査地がこの絵図のどの位置に当たるのかは不明であるが、「由佐城跡」の一部である事は疑いのないところである。

お城のはなし

香川県史 8 古代・中世資料

「国内出土の肥前陶磁」 九州陶磁文化館 1984

「肥前陶磁」 大橋康二 考古学ライブラリー-55

香南町史

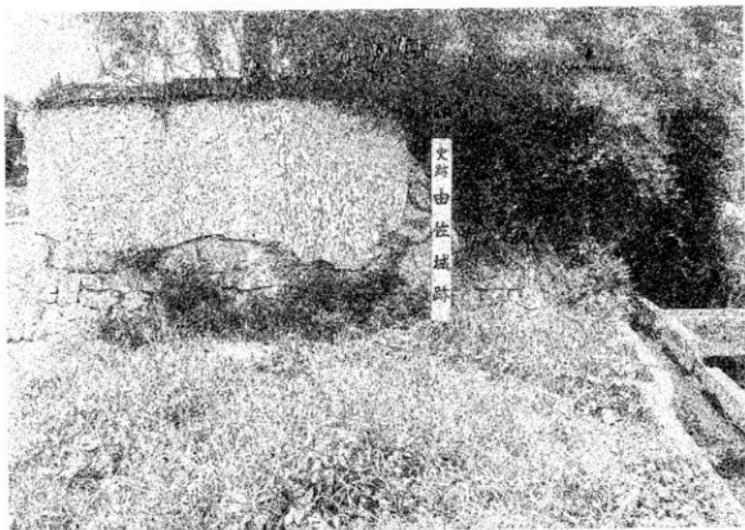
番号	評定番号 加減番号	出土場所	器 種	口径 (cm)			底 形 ・ 調 整	色 調	胎 土	備 考
				口 径	器 底	底 径				
1	9 9	SP-10	陶付蓋	13.4	3.7	4.8	内外：施釉	内外：香味がかった白 釉：白	密	
2	9 9	SP-10	陶付碗	12.5	6.6	4.8	内外：施釉	内外：香味がかった白 釉：白	密	
3	9 9	SP-12	須恵磁坏	14.0	3.4	8.0	内外面ともヨコナデ。	灰白色	1ミリ以下の砂粒 含む	
4	9	SP-15	土師器皿	7.4	1.0	6.1	内外面ともヨコナデ。外底面は赤キリ。	褐色	1ミリ以下の砂粒 含む	
5	9	SP-17	土師質附鉢			14.6	内面はヨコナデの残条痕。内底面は同心 円状のハケメ。	外：茶褐色 内：淡橙黄色	2ミリ以下の砂粒 含む	
6	9	SP-18	土師器皿	13.0			内外面ともヨコナデ。	乳白色	精良	
7	10	SP-20	土師器皿	9.8	6.2	1.8	内外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ。	黄白色	精良	
8	10	SP-20	土師器皿	10.0	6.0	1.9	内外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ。	淡茶褐色	精良	
9	10	SP-20	土師器皿	9.5	5.9	2.0	内外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ。 内底面に不定方向のナデ。	淡茶褐色	精良	
10	10	SP-20	土師器皿	9.7	1.95	4.3	内外面ともヨコナデ。底部はヘラキリの 後板正痕。	乳白色	1ミリ以下の砂粒 含む	
11	10	SP-20	土師器皿	9.6	6.0	1.9	内外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ。	淡茶褐色	細砂粒を含む	
12	10	SP-20	土師器皿	9.8	2.15	5.3	内外面ともヨコナデ。底部はヘラキリの 後板正痕。内面に不定方向のナデ。	淡褐色	赤色粒を少量含む	
13	10	SP-20	土師器皿	9.6	1.4	6.8	内外面ともヨコナデ。底部はヘラキリ。	褐色～黄褐色	1ミリ以下の砂粒 含む	
14	10	SP-20	土師器皿	9.8	1.9	5.8	内外面ともヨコナデ。底部はヘラキリの 後板正痕。	褐色	精良	
15	10	SP-20	土師器皿	10.0	1.9	5.6	内外面ともヨコナデ。	淡褐色	1ミリ以下の砂粒 含む	
16	10	SP-20	土師器皿	10.6	1.9	5.4	内外面ともヨコナデ。	褐色	精良	
17	10	SP-20	土師器皿	9.8	1.7	6.2	内外面ともヨコナデ。	乳白色	赤色粒含む	
18	10	SP-20	土師器皿	9.8	1.9	5.0	内外面ともヨコナデ。	淡茶褐色	細砂粒を少量含む	
19	10	SP-20	土師器皿	9.9	2.0	6.0	内外面ともヨコナデ。	淡褐色	1ミリ以下の砂粒 含む	
20	10	SP-20	土師器皿	9.7	1.8	6.1	内外面ともヨコナデ。	淡褐色	1ミリ以下の砂粒 含む	

番号	添付番号 図様番号	加工場所	算 額	法票 (cm)			底 形	調 量	色 調	用 上	指 号
				1.1径	器高	底径					
21	12 9	S K-01	桑付皿	14.7	3.0	5.2	内外：施釉		内外：青味がかった白 裏：灰白染付 青緑色	密	吹墨灰滑
22	12 9	S K-04	白磁ぐい呑	5.7	3.75	2.1	内外：施釉 高台：無釉		内外：やや青味がかった白 裏：白	密	
25	12	S K-04	唐津灰釉鉢			3.4	外：ナデ 底部は回転ヘラケズリ 内：施釉		内：灰釉 地：淡褐色 裏：淡褐色	密	砂目積み
24	12	S K-05	唐津灰釉鉢				外：回転ヘラケズリ、体部上半施釉 内：施釉		内外：灰釉 地：淡褐色 裏：灰色	密	胎土目積み
25	16	堀 1	瓦				外：タタキ ナデ 内：ナデ 探仕儀		内外 灰色 (須磨質)	2ミリ以下の粗砂 粒含む	布目 1cmに 8本
26	16	堀 1	瓦				外：タタキヘラミガキ 内：ナデ 春日 ナデ		内外 灰色	1～3ミリの砂粒 含む	布目 1cmに 12本
27	17 10	堀 1	唐津灰釉鉢			3.5	外：ナデ 底部は回転ヘラケズリ 体部上半施釉 内：施釉		内外：やや青味がかった灰釉 地：淡褐色 裏：淡褐色	密	砂目積み
28	17	堀 1	唐津灰釉鉢			3.8	外：体部上半施釉体部下半、底部回転 ヘラケズリ 内：施釉		内外：緑がかった灰釉 地：淡褐色 裏：淡褐色	密	砂目積み
29	17	堀 1	唐津灰釉鉢			3.6	外：体部上半施釉体部上半、底部回転 ヘラケズリ 内：施釉		内外：灰釉 地：灰白 裏：灰白	密	
30	17	堀 1	唐津灰釉皿				外：施釉 内：施釉		外：灰釉 内：施釉 裏：淡茶褐色	密	
31	17	堀 1	唐津灰釉壺				外：施釉 内：施釉		内外：灰釉	密	
32	18 11	堀 3	唐津灰釉鉢	12.4	2.3	4.7	外：回転ヘラケズリ 体部上半施釉 内：施釉		内外：緑がかった灰釉 地：淡黄褐色 裏：灰色	密	胎土目積み

車号	車両番号 (関係番号)	出土場所	部 種	法寸 (cm)			形 状・測 量	色 質	胎 土	電 力
				口徑	器高	底径				
33	18 10	Ⅲ3	唐津灰釉瓶	11.1	3.25	4.4	外：体部上半施釉 体部下半無釉 ヘラケズリ 内：施釉	内外：緑がかった灰釉 地：淡橙黄色 断：灰色	密	砂目積み
34	18 10	Ⅲ3	備前粗鉢	31.1	13.5	16.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデの後垂径（1単位11本）	内外：赤褐色 2ミリ以下の砂粒 含む		
35	19 9	Ⅲ上層客土	唐津灰釉瓶	12.1	3.4	4.1	外：体部上半施釉 体部下半無釉 ヘラケズリ 内：施釉	内外：緑がかった灰釉 地：淡橙茶色 断：淡黄褐色	密	砂目積み
36	19 9	Ⅲ上層客土	唐津灰釉瓶	10.6	3.3	4.3	外：体部上半施釉、ナデ 体部下半無 釉ヘラケズリ 内：施釉	内外：灰釉 地：淡黄色 断：淡黄色	密	砂目積み
37	19	Ⅲ上層客土	唐津灰釉瓶	15.2			外：体部上半施釉 ナデ 内：施釉	外：灰釉 内：灰釉 鉄釉 地：黄褐色 断：淡黄褐色	密	
38	19	Ⅲ上層客土	唐津灰釉瓶				内外：施釉	外：灰釉 内：鉄釉 口縁部：黄釉 地：灰色	密	
39	19 9	Ⅲ上層客土	唐津灰釉瓶				内外：施釉	内外：施釉 地：橙茶色 断：淡橙茶色	密	
40	20 11	溝	須恵器甕				口縁部内外面はヨコナデ。外面体部は橙 子目タタキ。	灰色		精良
41	20 11	溝	唐津灰釉瓶			4.2	外：体部上半施釉 体部下半無釉ヘ ラケズリ 内：施釉	内外：灰釉 地：褐色 断：淡褐色	密	砂目積み
42	20 10	溝	土師貫火鉢				内面はナデ。	褐色		2ミリ以下の砂粒 含む
43	20 10	溝	唐津灰釉瓶			5.2	内外：施釉 底部：無釉 口縁ヘラケズリ	内外：灰釉 地：淡乳黄色 断：淡乳色	密	
44	20 10	溝	京焼天目鉢	12.1	6.7	3.9	外：体部上半施釉体部下半無釉 ヘラケズリ 内：施釉	内外：鉄釉 地：淡乳褐色 断：白褐色		ややさくい

番号	詳細な 図版番号	出土場所	器種	径 (cm)			形状・用途	色調	胎土	備考
				口径	器高	底径				
45	24		瓶	13.1	39.3	18.4	口縁部内外面にヨコナデ 外面作部上字に施輪	内外：茶褐色 輪：淡緑黄色	1ミリ以下の砂粒 含む	
46	29	採集	瓦				外：ヘラミズキ 内：ヘラ調整 コビキB	内外：黒灰色 胎土：灰色	粗	
47	29	採集	瓦				内：ヘラケズリ	黒灰色	普通	
48	29	採集	須恵器				内外面ともヨコナデ	灰色	精良	
49	29	採集	須恵器輪	11.2			内外面ともヨコナデ	灰色	1ミリ以下の砂粒 含む	
50	29	採集	土師器土器 脚					橙茶色	1ミリ以下の砂粒 含む	
51	29	採集	白磁器	11.4			内外：施輪	内外：白色 胎：白灰色	密	
52	29	採集	染付焼				内外：施輪	内外：白色 染付：青色 胎：白灰色	密	
53	29	採集 11	白磁器			5.1	内外：施輪 高台：無輪	内外：白色 胎：淡褐色 胎：白灰色	密	
54	29	採集	白磁器	10.6	6.85	4.1	内外：施輪 高台：無輪	内外：白色 胎：白灰色 胎：白灰色		
55	29	採集 11	刷毛目皿			10.7	外：体部上半施輪 体部下半回転 ヘラケズリ 内：施輪	内外：刷毛目胎 胎：橙色 胎：橙色	密	
56	29	採集	陶器底部				外：ヘラケズリ 内：ヨコナデ	外：暗茶色 内：赤褐色 胎：灰色	1ミリ以下の石灰 ・炭石含む	底部に宛刺印痕

圖 版



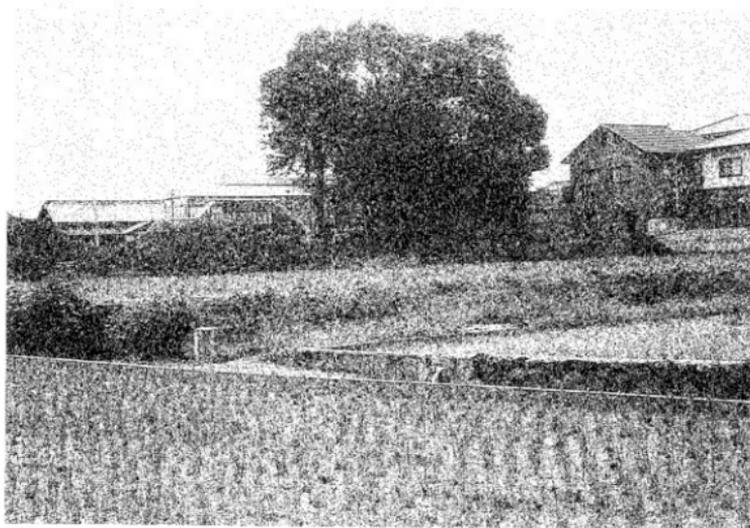
(1) 調査前状況（屋敷外道路側から）



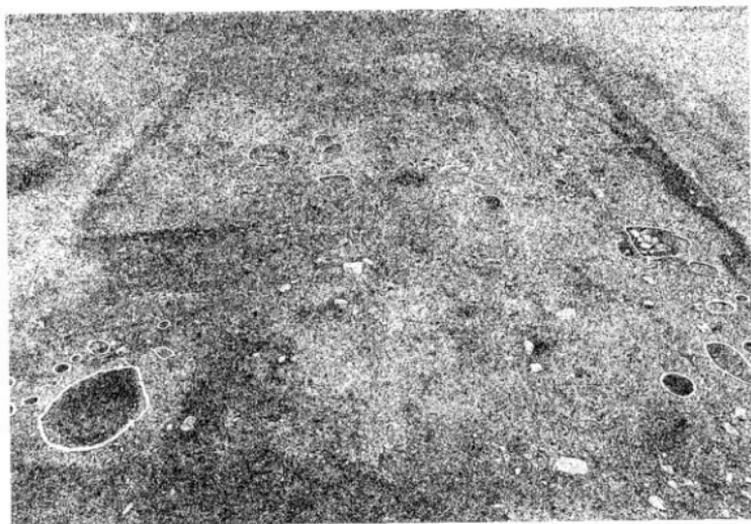
(2) 調査前状況（東南から）



(1) 土塁調査前状況 (南から)



(2) 調査前遠景 (東南から)



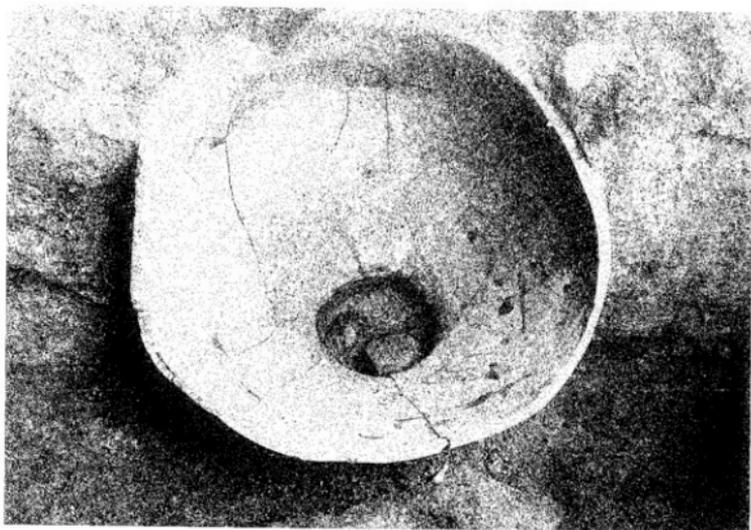
(1) 遺構完掘状況 (全景)



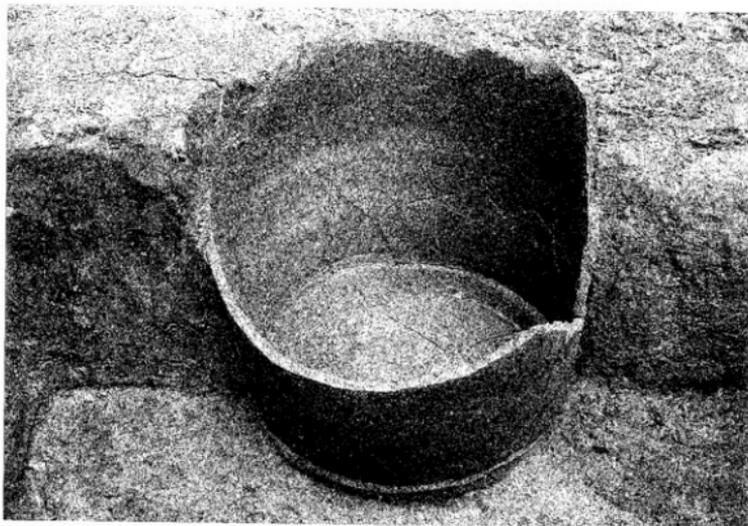
(2) S P-01柱根検出状況



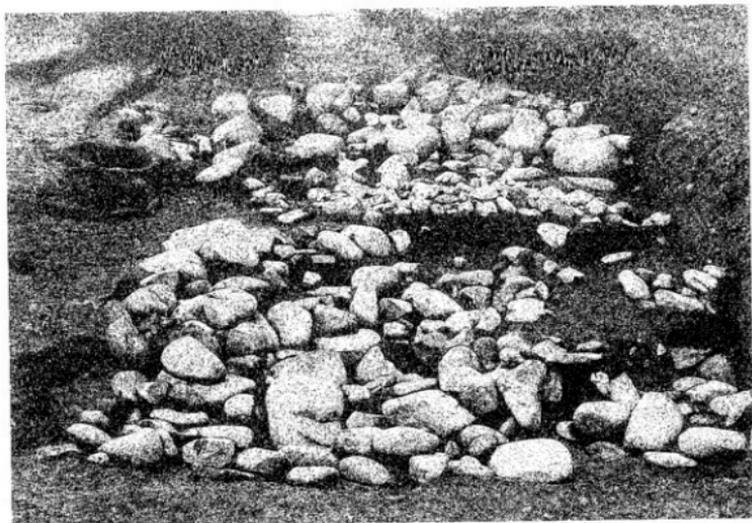
(3) S P-18柱根検出状況



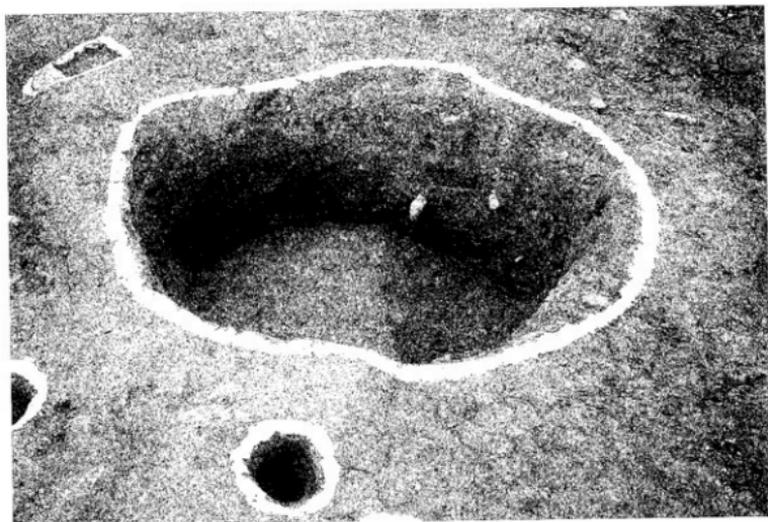
(1) 瓶 3 検出状況



(2) 瓶 1 検出状況



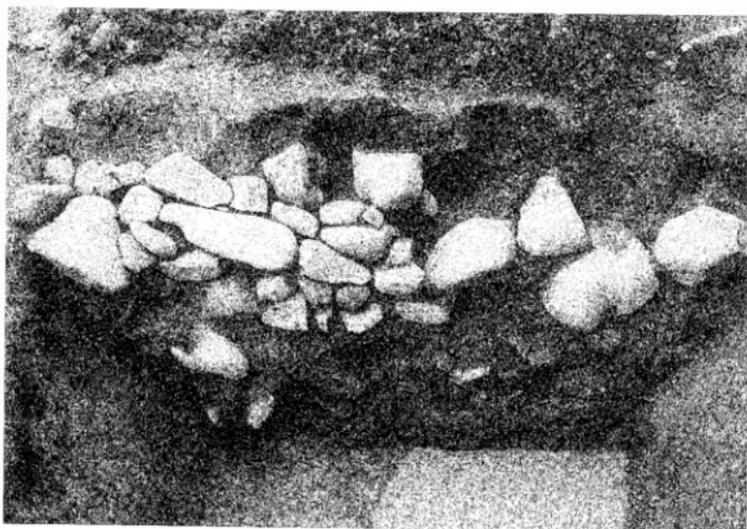
(1) 堀・池検出状況（北から）



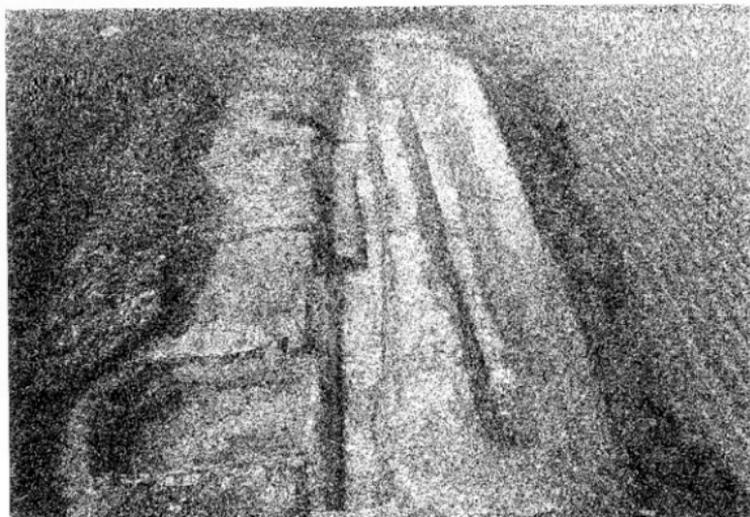
(2) S K-01完掘状況



(1) 堀1断面状況 (南西から)



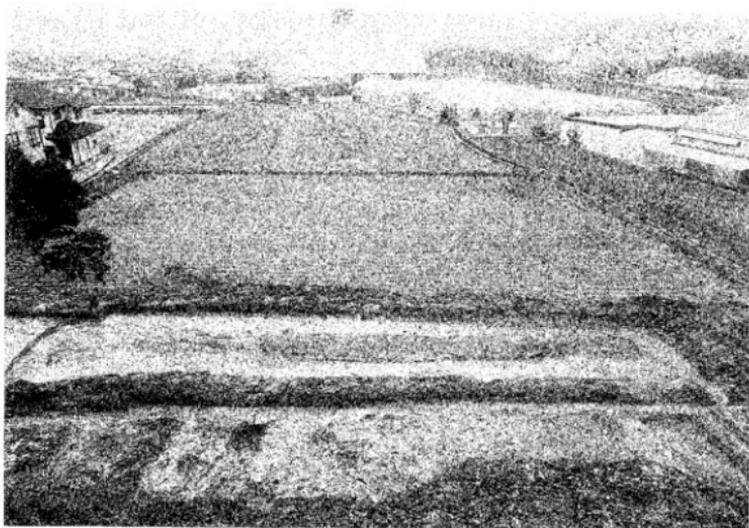
(2) 堀1断面状況 (西から)



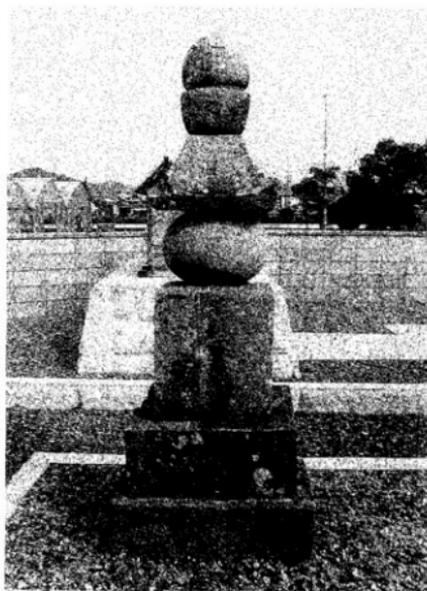
(1) 堀完掘状況（東上空から全景）



(2) 堀完掘状況（東上空から東端部）



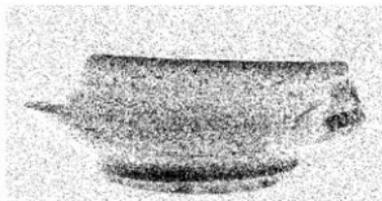
(1) 堀完掘状況と墓地周辺（南上空から）



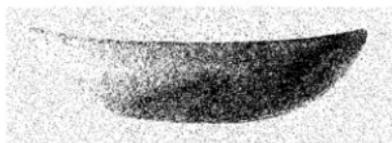
(2) 由佐左京進藤原秀盛の墓



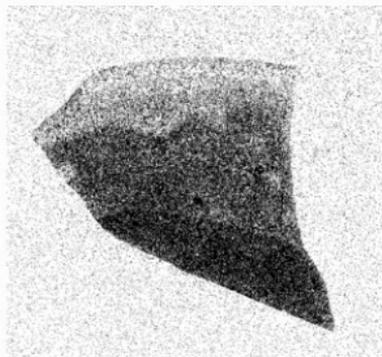
S K -04出土遺物



S P -10出土遺物



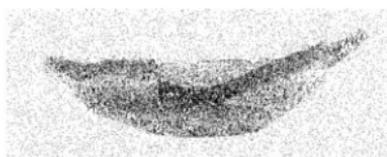
S P -12出土遺物



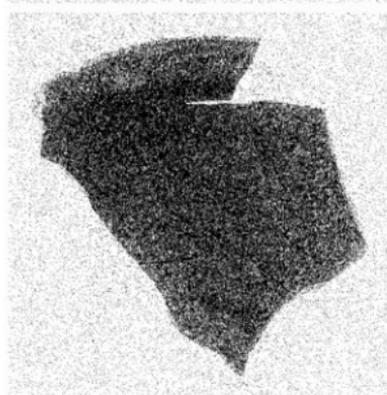
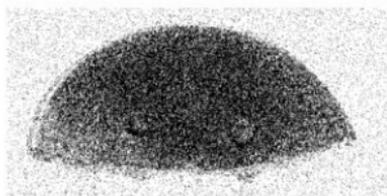
堀上客土出土遺物



S K -01出土遺物

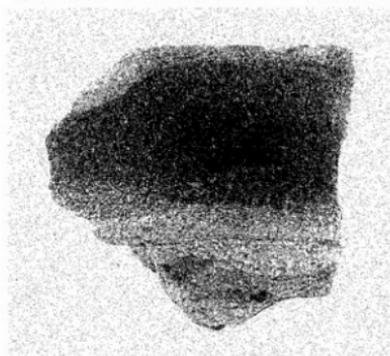


堀1出土遺物



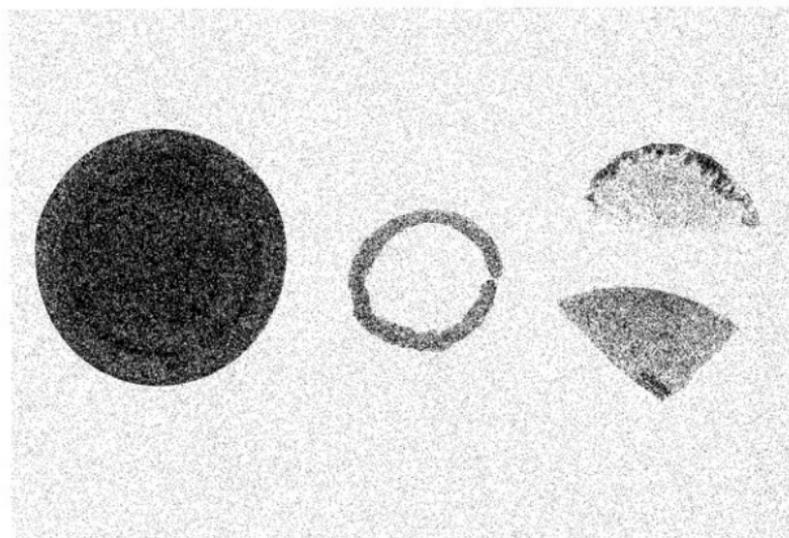
堀3出土遺物

溝内出土遺物



採集遺物

溝内出土遺物



瓶2内出土遺物

由 佐 城 跡
—由佐城跡発掘調査報告書—

1997年3月31日発行

編集
発行

香南町教育委員会
〒761-14 香川県香南町大字由佐1172
電話 0878-79-3111

印刷

株式会社 成 光 社
〒760 香川県高松市朝日町5-14-2
電話 0878-23-0222